様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成２３年　　６月　３　日現在

機関番号：３４３１９
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2007 年度～2010 年度
課題番号：１９５３０４８０
研究課題名（和文）　障害者と芸術活動に関する社会学的研究～社会における自己表現

研究課題名（英文）　The sociological study of handicapped person and art: expression of self in society

研究代表者　藤澤　三佳（FUJISAWA MIKA）
京都造形芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号：００２５９４２５

研究成果の概要（和文）：障害者の芸術活動に関して精神障害を中心として社会学的考察をおこない、人間の自己表現の必要性とその意味を明らかにし、社会からの孤立を強いられがちな人々が、芸術活動を通して、他者からの共感を得て、社会のなかに生きている意識や生の充実感を再獲得する変化のプロセスを明確にした。また、医療・福祉と芸術の分野の交差領域にある芸術社会学の理論枠組みを示し、各領域がどのように融合され、そこで社会学的研究が可能かを明確にした。

研究成果の概要（英文）：
In this research, the sociological consideration about the art of handicapped person especially the art of the mental patients was done. The necessity of expression of self and the meaning of it became clear and the changing process was clarified that people who had passed the lonely life regained one's life, the consciousness of living in society through the activity of art and of sympathy of other people.
I made the theory of the sociology of art which was in the crossing place of medical care and the art. I also clarified how the each field of medical care and art was merged and how the sociological study was made possible in there.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2007 年度	800,000	240,000	1,040,000
2008 年度	700,000	210,000	910,000
2009 年度	800,000	240,000	1,040,000
2010 年度	800,000	240,000	1,040,000
総　計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：社会科学
科研費の分科・細目：社会学・社会学
キーワード：障害者、芸術、自己表現、臨床社会学、芸術社会学

１．研究開始当初の背景

（１）本研究課題の申請時における背景・動機に関しては、障害者の芸術活動に関しての社会学的研究は、先行研究が

学と芸術社ほとんど存在していないので、これから開拓されるべき研究領域であったという点があげられる。

（２）障害者の社会における差別や障壁と関係する生きづらさという感情に焦点をあてて、それが芸術活動という自己表現をおこなうことによって、どのように解消されて、充実した生を再獲得していくかという点に関して、個人の心理的変化をみる心理学的研究ではなく、人間関係のネットワーク等を中心とした社会学的研究の必要性が存在していた。

（３）特にこの研究が、医療・福祉社会会学の交差領域に存在しているため、医療、福祉、芸術というそれぞれの分野における「障害者の芸術活動」の実態と異なった意味づけを探求し、さらにそれらを社会学的、人間学的な視点から融合させることが必要であると考えた。

２．研究の目的

本研究は、障害者の芸術活動に関して、調査研究と理論研究の両面から研究をおこなうものである。その目的は、社会における自己表現、社会と芸術との関係性の新しい動きを探求し、医療・福祉と芸術の分野の交差領域にある臨床芸術社会学というべき分野の理論及び調査枠組みを示すことである。

「障害」を含めた人間の生の多様性が、芸術という領域においてどのように表現され、社会に提示されているか、またそれは作者にとっていかなる意味をもち、社会にとってはどのような変化をもたらしているか調査・理論研究により明らかにすることを目指している。

（１）調査研究の側面として、当事者にとっての鑑賞者やボランティア等との社会的関係、造形教室内における社会的、人間的関係、当事者の生活史におけるその意味の分析をおこない、さらにその自己表現を見る鑑賞者はどのように感じ、さらにどのような社会的変化がひきおこされるかという点も含めて、詳細な相互作用論的分析を研究成果において示す目的をもつ。

（２）理論研究の側面として、芸術社会学の相互作用論的アプローチ、あるいは「芸術」への相互作用論的アプローチの理論的枠組みを上記調査結果より導出する目的をもつ。

また社会における「芸術活動を中心とした自己表現」という観点から研究をおこなうことで、社会学において従来おこなわれてこなかった言語的な表現や意味づけに限定されない、非言語的な多様な表現を、社会学的枠組みに導入し、把握する目的をもつ。この点で、社会学や人間学が、理論的枠組みを拡大し、精神分析学、臨床心理学、芸術学とも融合する視点を探求する目的をもつ。

３．研究の方法

（１）本申請研究の研究方法としては、理論的には、精神医学、臨床心理学、芸術学の交差領域にあるため、それらの各領域における障害者の芸術活動に関する文献や資料の現在に至るまでの歴史的研究を、日本と海外の事情を比較しながらおこなった。

（２）また、現在の精神病院内における造形活動及び、摂食障害者の芸術活動に関する参与観察及びインタビュー調査を中心とした質的研究をおこなったが、それにあたり、エンパワメントな方法を用いた。すなわち、一方的に調査者が調査対象者を調査するのではなく、共に、

表現された絵や詩を展示したり、語り合いの機会を開いたりするなかでおこない、また例えば大学のギャラリーや予算、学生という鑑賞者など、調査者のもっている力や資源を提供し、さらに、その調査結果もできるだけ、フィールドで生活する人々に還元されるという社会的意義をもつような方法を用いた。

４．研究成果

下記論文において、以下６点を研究成果として示した。そのうち（１）～（４）に関しては、論文３，４として、（５）は論文１として、（６）は論文２、書物１として発表をおこなった。

（１）まず、本研究は、医療・福祉と芸術の交差領域の研究であるが、特に 1960 年代以降、日本や海外の実態を分析した結果、芸術療法としては、医療―芸術間の比重のバリエーションが存在するものの治療が目的とされており、他方、芸術の領域においては「アウトサイダー・アート」という名称を用いながら、芸術的価値が高いとされる作品を生み出す目的が存在していることを明らかにした。しかし、そのいずれもが、障害者当事者の表現や「生」から切り離されがちな枠組みであることを明確にし、本研究のような社会学、人間学的考察が必要である意義を示した（下記、学会発表、４）。

（２）第二点目として、上記の医療の枠組みにおける芸術療法とも、また芸術の世界の、いわゆる「アウトサイダー・アート」の流れとも一線を画する芸術活動に関する調査をおこない、日本における精神障害者の造形活動の先駆的存在であり、国際的にも注目されているH精神科病院における造形活動を取り上げ、それが花開く土壌としての病院の環境に関して、1960年代以降の歴史的変遷を明らかにした。医療・福祉の場における1960年代の文化・芸術的状況の創成期、造形教室という集団の役割、指導者やメンバー間の関係、鑑賞者や支援者の果たしている役割を中心にして分析をおこなった。

また、国内の状況と、海外における障害者の芸術活動との比較研究をおこないながら、Ｈ病院造形教室におけるような造形活動はどのようにして可能であるのかという条件、要因、背景等に関して示した。また、当時の劣悪だと批判が高かった精神医療と対比して、本研究が中心として扱った精神病院の特徴や自然治癒力を重視する基本的考え方を示した（下記、学会発表、５）。

（３）第三点目として、障害者を支える人間的、社会的ネットワーク及び、自己表現を可能とする造形活動の性格を明らかにした上で、そこでは、「作品」だけではなく、その「人間」も表に出しており、そこで彼らは自分の苦しみをアートや言葉の両方で自己表現することが可能となる点を、表現者の具体的事例に沿って考察、分析をおこなった。

症状を抱えていても、或いは抱えているからこそ自己を表現しないと生きていけないという、人間の自己表現の必要性とその意味を明らかにし、いろいろな剥奪体験をもち社会からの孤立を強いられがちな人々が、社会のなかに生きている意識や生の充実感を再獲得して、創作を見てもらうことは、「生きている証」と感じるに至る変化のプロセスを明確

にした。

また、表現したものに対する他者からの共感によって自らの存在証明を得て、視線は症状や個人的な問題にとどまらず社会に向けて開かれていき、社会的意義が感じられている点を明らかにした。さらに弱さを逆バネとして社会に問い直すプロセスが生じていることを示した（下記、学会発表、６）。

（４）第四点目として、これらの自己表現がもたらす鑑賞者側の変化、人間の生の多様性の表現を知ることによる社会の価値観の変化に関して、鑑賞者の意識の変化の分析をおこなうことで明らかにした。変化したのは表現者だけではなく鑑賞者も変化しており、人間の生の多様性の表現の方法を社会に向かってさまざまな形で示すことによって、社会の価値観に変化を生じさせていることを明らかにした（下記、学会発表、７）。

（５）第５点目として、さらに摂食障害の精神的な症状を示し、生きづらさを抱え、アートによる自己表現をおこなっている人々に対して、絵画、自己を撮る「セルフ・ドキュメンタリー」という映像の二種類の媒体に関して調査し、下記記載の４件の学会報告（下記、学会発表、１，２，３，４）において示した。

自らの境遇を自分でセルフ・ドキュメンタリーを撮ることで自己表現して、症状を克服しようとするプロセスを、論文「セルフ・ドキュメンタリーという自己表現」において分析した（下記、論文、１）。

（６）理論研究の側面においては、障害者の生活史分析をおこなうため、シカゴ学派を源流とする臨床社会学的生活史研究の理論研究をおこなう上で、クリフォード・ショウの研究をとりあげ、その調査の理論的枠組み、調査方法論と生活史理論を下記記載論文において検討した（下記、論文２）。

また、芸術社会学の枠組みに関して、社会と芸術の新しい関係を示す芸術社会学の枠組みを示す目的により、海外や国内の関連文献の収集をおこない、『文化の社会学』において、芸術社会学の創始者であるフランスのピエール・フランカステルの『絵画と社会』に関して考察し、「芸術社会学」を執筆した（下記、図書、１）。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計４件）

１． <u>藤澤三佳</u>、精神科病院における造形活動と患者の自己表現、社会臨床雑誌、社会臨床学会編、査読（有）、１８巻、３６頁～５２頁、2011年

２． <u>藤澤三佳</u>、臨床のアート、社会臨床雑誌、社会臨床学会編、査読（有）、１６巻、４２頁～５０頁、2009年

３． <u>藤澤三佳</u>、1920年代における非行少年「自身」の物語：クリフォード・ショウの生活史の方法、社会臨床雑誌、社会臨床学会編、査読（有）、16巻、110頁~115頁、2008年

４． <u>藤澤三佳</u>、セルフドキュメンタリーという自己表現、社会臨床雑誌、社会臨床学会編、査読（有）、１５巻、８６頁～８８頁、2007年

〔学会発表〕（計７件）

１． <u>藤澤三佳</u>、精神病院における造形活動に関する考察～患者の「自己表現」の観点から～、日本社会学会、2010年11月６日、名古屋大学

２． 藤澤三佳、精神科病院における絵画活動、日本臨床心理学会、2010 年 9 月 25 日

３． 藤澤三佳、精神病院における「自己表現」としての絵画活動―H精神病院における絵画活動の事例より一、日本社会学会、2009 年 10 月１２日、立教大学

４． 藤澤三佳、生きづらさと自己表現、日本社会学会、2008 年 11 月 24 日、東北大学

５． 藤澤三佳、生きづらさを抱える若者がアートによって自己表現するということ、日本臨床心理学会、2007 年 9 月 7 日、立教大学

６． 藤澤三佳、生きづらさを感じる人々による自己表現～アートやセルフ・ドキュメンタリーによる、日本社会学会、2007 年 11 月 17 日、関東学院大学

７． 藤澤三佳、生きづらさを感じる人々の自己表現と自己イメージの変化、関西社会学会、2007 年 5 月 27 日、同志社大学

〔図書〕（計１ 件）
藤澤三佳、「芸術社会学」、井上俊、伊藤公雄編、『文化の社会学』、世界思想社、2009 年、7 月 31 日、２１９－２２８頁

６．研究組織

(1)研究代表者

藤澤 三佳（FUJISAWA MIKA）
京都造形芸術大学・芸術学部・教授
研究者番号：００２５９４２５

(2)研究分担者

(3)連携研究者